

2019年度(平成31年度)学校評価自己評価表

福山市立精華中学校区	校番 15	福山市立 精華中 学校
最終更新日	2019年(平成31年)10月1日	

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
 ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	創造性	批判的思考・問題解決・意思決定	耐える力	人としての思いやり
- 児童生徒は素直で、ボランティアや地域の行事にも積極的に参加し、社会に貢献している。 - 学校の課題を詳しく示し、学校の取組の様子を今後も伝えてほしい。	- 規範意識が高く、言われたことに対して守ろうとする。 - 自己表現力が弱く、分かりやすく話したり書いたりすることに課題がある。 - 地域とのかかわりが強く、中学校区に対する愛着は強い。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	生活や社会をよりよくするための課題を見つけ、既習事項を活用して、自分の考えや意見を表現している。	生活や社会をよりよくするため、様々な情報を多面的・多角的な見方で分析し、課題を適切な方法で解決している。	よりよい生活や社会の実現のための目標を達成するために粘り強く工夫しながら取り組んでいる。	よりよい生活や社会の実現のために、他者に配慮しながら、多様性を尊重し協働して学び続けている。
		中学校区として統一した取組等	自分の考えを、話す・書く等で表現させる。	根拠を持って考えを表現させる。	目標を決めて、最後までやり遂げようとさせる。	相手の立場に立って考え行動させる。

III 自 校

ミッション	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	創造性	批判的思考・問題解決・意思決定	耐える力	人としての思いやり
校区内での少子・高齢化の進展の中にあつての人材育成 ① 学力の定着と向上を図る。 ② 安心・安全で落ち着いた環境の中、豊かな感性を育てる。 ③ 地域の一員として、地域の行事に積極的に参加する生徒を育てる。	めざす子ども像	日常生活や地域社会をよりよくするために、自分の考えや意見を話したり書いたりしている。	日常生活や地域社会をよりよくするために、様々な情報の中から必要な情報を活かし、解決している。	より高い目標を達成するために、粘り強く取り組み、やりぬいている。	相手の立場に立って、誰に対しても思いやりの心を持って接している。
		生活や社会をよりよくするための課題を見つけ、既習事項を活用して、自分の考えや意見を話す・書く等で表現している。	生活や社会をよりよくするため、様々な情報を多面的・多角的な見方で分析し、課題を適切な方法で解決している。	よりよい生活や社会の実現のための目標を達成するために粘り強く工夫しながら取り組んでいる。	よりよい生活や社会の実現のために、他者に配慮しながら、多様性を尊重し協働して学び続けている。
学校教育目標					
夢と志を持ち、社会に貢献できる生徒の育成					
現 状					
<児童生徒> ・素直であり、校内・地域でのボランティア活動にも積極的に参加している。 ・体育大会や文化祭等では主体的に活動できるが、日常的なボランティア活動等には自ら進んで考え行動する主体性に課題がある。	研究	教科等	道徳		
<授業> ・ペア・グループを活用して、生徒どうして「わからない」が言え、学び合いができてあるが、思考を広げたり深めたりすることがなかなかできない。 ・進んで課題に取り組もうとするが、自分の考えと理由をうまく表現できない。 ・自ら考え学ぶ主体性に課題がある。		主題・内容等	自他を大切にし、認め合い高め合う生徒の育成 ～ 人権を尊重する授業づくり、人間関係づくり、環境づくり ～		
	めざす授業の姿	課題に対して、自ら進んで考え、仲間と関わり合い、練り合いながら協働的に課題を解決していく、一人も残らず学ぶ授業			

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立 精華中 学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	70% 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	70% 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	主体的で深い学 び	★	継 続	課題に対して、自ら進 んで考え、仲間と対話 を通し、課題を解決し ていく、一人も残らず 学ぶ授業づくりの推 進	①「解決したい」と思 わせる課題設定や 導入発問の工夫 ■ ②目的を明確にし、対 話を通し、学びを深 める場の設定 ■・□ ③自主学習ノートで 効果的に学習させ る。	ア「解決しようとする 課題について、『なぜ だろう』と思う。」生 徒肯定的評価 回答80%以上 イ「『やってみたい。』 と思う。」生徒肯定 の評価80%以上 ウ「授業で、対話を通 し学びを深めている。 」生徒肯定的の評 価回答80%以上 エ「授業で、対話を通 し学びを深める場 を設定している。」 教職員肯定的評価 100% オ4月の学力テスト の活用問題を12月 に再度実施し、正答 率が上回る人70% 以上 カ学力テストの50m 走で4月に測定し た記録を上回る人 70%以上	教えることはきち んと教えるとともに 、生徒のつぶやき や疑問に耳を傾け、 拾い上げ解決させて いく授業づくりに取 組んでいる。 3回のブロック別 研修で学んだことを レポートにまとめ、 校内研修で交流し、 授業改善に取り組ん でいる。 夏季休業中の小中 合同研修では、公立 高校の入試問題を解 き、今求められてい る資質・能力につい て学んだ。 ア 85%(+5%) イ 79%(-1%) ウ 85%(+5%) エ100%(±0%) オ活用問題を12月 に再度実施する計 画である。 カ瞬発力を高める取 組をしている。 12月に再度測定 する計画である。	4	4	アイウエオに対して 今後2回予定され ている教科ごとのブ ロック別研修で学ん だことをレポートに まとめ、校内研修で 交流し、授業改善に 取り組む。 校区の小中合同授 業研究で、小学校で の指導内容・指導方 法を理解し、中学校 の指導方法に生かし ていく。 月2回実施する Seika time の中 で、取り組んでみたい 課題を生徒が考え、 自分の考えを書き、 交流し、他の人の考 えを聞いて、振り返 りをする中で、主体 的で深い学びをさせ ていく。 10月末の小中合 同研修では、公立高 校の入試問題を解 き、今求められてい る資質・能力につい て学んでいく予定で ある。					
				主体的に読書活動に 取組む生徒の育成	①「おすすめ本」紹介 文の作成 ②読書郵便 ③図書室利用向上	ア「おすすめ本」を持 ち紹介できる生徒 を90%にする。 イ文化祭で読書郵便 を行う。 ウ図書室を週に1回 以上利用した生徒 50%以上	ア本を読み、「おすす め本」を探してい る状態である。 イ文化祭で読書郵便 を行い、紹介して もらった本を読ん でいる。 ウ「図書室を週に1 回以上利用した」 26%(-24%)	3	3	ア 12月に、「おす すめ本」を紹介す る文章を作成する 予定である。 ウ 図書委員が「お すすめ本」を紹介 したり、積極的に 図書室を利用する ことを呼び掛けたり、 読んだ本のペ ージ数を記録す る。					
1	自ら考え判断し 行動する			主体的にボラン ティア活動が行える 生徒の育成	①月1回のボラン ティア活動への積極 的参加 ②地域ボランティア への参加	ア「積極的に参加でき た」生徒肯定的回答 80%以上 イ地域ボランティア に1回以上参加 70%以上	ア87%(+7%) イ95%(+25%) 地域へのあいさつ 運動もふくめ、意 欲的に行動した。	4	4	月1回の校内ボラ ンティアにも、継続 的に取り組む。金江・藤 江の地域の文化祭に も積極的に参加する。					

				主体的に環境づくりに取り組む生徒の育成	①他者と協力しながら行う清掃活動 ②生徒の学ぶ意欲を奮起する掲示物の作成	ア「協力して清掃活動をしている」生徒肯定的回答90%以上 イ学習活動の成果を掲示する	ア 97%(+7%) イ よいノートをコピーし掲示し、生徒の意欲につなげている。	3	4	ア 各清掃担当者は、生徒の頑張りを引き出す声かけを継続的にする。 イ 学習活動の成果を掲示する機会を増やす。					
1	働き方改革		新規	教職員の笑顔と元氣をつくる	①業務改善の会議を行う ②校務支援員の活用工夫	ア1ヵ月の時間外勤務が45 時間未満の職員を70%以上	ア 9月の時間外勤務が45時間未満75%(+5%) 数値目標は達成できた。持ち帰り仕事は増えているので、教職員の笑顔と元氣をつくるための業務改善に取り組む必要がある。	3	4	2学期中に業務改善の会議を行うとともに、校務支援員の先生への計画的な仕事をお願いをする中で、持ち帰り仕事を減らしていく。					

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。